

私の予科練、伏竜隊の思い出

滋賀県 川合逸夫

思えば戦後六十一年、戦争を知らない世代が七〇パーセントを越え、平和の有り難さが薄れ、この豊かさが当たり前と思われる今日、その陰に尊い失われた多くの命があることを忘れてはならない。悲惨な戦争が二度とないことを願って私の体験を申し上げます。

私は昭和二（一九二七）年二月に生まれました。入隊時の家族の状況は母一人、子供四人で父は死亡、母・はまよの元に兄・真澄は銀行勤務で応召中、私逸夫、それに妹の田鶴子は女学生で学徒動員、弟の琢はまだ小学生でした。私は木曾川西小学校から県立一宮商業学校（農業、工業、商業の三学級）に入学しました。

当時、戦況はますます我が国には非になり、一億総動員体制となり、本土決戦の様相が色濃くな

ってきた時代であります。私が三年生で、来年の昭和十九年三月卒業のところ、繰り上げ卒業となり、昭和十八年十二月に卒業となりました。そして、直ぐ軍需工場に就職させられました。三年生だった私も海軍の艦爆機「彗星」製造工場の愛知航空に就職しました。妹の女学校も軍需工場に動員されて、とても勉強どころでは無かったです。

愛知航空に九カ月勤務しましたが、当時は御国のために一命を捧げることが大義であり、「七つ釘は桜に錨」と「首に白絹のマフラー」の赤い血潮の予科練は、若い青少年たちの憧れの的でした。我も我もと志願したものです。

私も昭和十九年七月、予科練の試験を見事合格、九月四日、岐阜垂井の美濃一宮南宮神社で武運長久のお守札を頂き、滋賀県大津市滋賀里の予科練、滋賀海軍航空隊に入隊しました。ここで昭和十九年九月から二十年三月までの六カ月間の基礎訓練を受けました。

基礎訓練は海軍全般の事情、航空機の基礎教育

（実物は無く、学科ばかり）、陸戦教育、気象学等で、特に通信は重点的に徹底的に鍛えられました。

「トンツウ、トンツウ」には寝言にまで「トンツウ」で、本当にこの「トンツウ」には泣かされました。一分間に百字解読出来れば一人前です。送信訓練より受信訓練が主でした。

滋賀海軍航空隊（予科練）の概要

滋賀海軍航空隊には八個分隊があり、一個分隊は約二百五十〜二百六十人、さらに一個分隊は八班に分けられ、一個班は約三十二〜三十五人です。

分隊長は大尉、古参中尉、分隊士は補助役の少尉、兵曹長各四人、班長は下士官と上、一、二等兵曹、でした。私は第六班で、班長は大阪外語大卒業のN班長、二等兵曹で班長以下三十四人でした。誠に幸いだったのは、N班長は予備学生を受験してスベリ、今度は下士官志願をして下士官になった方でしたので、海軍のしきたり等何も知らないインテリ班長で、シゴキが一番少なかったの

です。

一兵卒から叩き上げられて二等兵曹になったような強者が班長でいる班は、例の「精神注入棒」で尻を叩かれたりします。「男たちの大和」と言う映画にも、このバットのしごきの場面があります。我々の班長は半年間にたったのバット二発だけ、隣の班などは毎晩でした。

海軍の下士官は、二等、一等、上等兵曹です。

成績が良いと「善行証」と言う記章を袖に貰います。他の班長は二本も三本も付けているのに、我が班長は一本も無い、そんな班長（善行証の無い班長）のことを「ボタモチ班長」と言いましたが、私達にとつては本当に良い班長さんでした。

六カ月の教育は、先にお話した通信の教育のほかに団体教育があり、団体教育は特に闘争心の高揚を図るものと思われました。分隊対抗で騎馬戦、棒倒し、カッター漕競技等で、負けたら班に帰っても晩飯抜きで何が何でも勝たねばならないです。まさか本当に食えない班は無かったと思いますが、

しつかりしぼられることには間違いありません。

しごきにもいろいろありましたが、カッターから始まって洗面器に水を張って頭上に上げるとか、腕立て伏せ、鶯の谷渡り、練兵場何周走れとかでした。練兵場走れが一番楽でしたが、何番以下はもう一周と言われるので皆真剣に走りました。中には途中で誤魔化す者もいるので教員が何人も目的地に待っていて、来た者にチョークで印を付けます。後で順番に並んでシヤガメと言うので不思議に思っただら、チョークが付いていない者はバレてしまっただ変だった事等、大変なことにも楽しいこともありました。

私の人生体験の中で、自我と言うものを許されない一年間の軍隊生活、団体生活は私の人生に取って大きなプラスであったと思います。お袋に言わせると「親に心配を掛けんようになって来ただけ、お前は良くなった。一番の親孝行だった」と、実は私は前はおとなしい子でしたが、父親が中学一年の時に亡くなりましたので、それからは要注

ます。一番下が十五歳で、上が二十歳です。私は真中の十七歳でした。十五歳の同期生は、尋常高等小学校の高等科を卒業してすぐ志願入隊した者でしょう。体もまだ大人になっていなくて小さく、体力も無く可哀想でした。

海軍は練習船で世界中をあちらこちら回ります。それに明治の初めに万事イギリスから様式を取り入れたので、海軍にはゼントルマン精神があると言われますが、陸軍はフランス、ドイツ陸軍の流れを受けたものですから、その点が非常に違っています。

陸軍では英語は敵国語として一切使わせなかつたが、海軍は別でした。海軍では身嗜みみかたながやかましく、外出時にもズボンのラインがきちんと付いているかとか注意されました。

昭和十九年入隊した時に映画を見せてくれました。練兵場の真中に白い幕を張って、上官達は正面から、私達は裏側から観ましたので、左右が反対に見えます。その映画はアメリカ映画の「大平

意者の方になり、三学期の期末にはお袋が呼び出しを食ったりして、親に心配を掛けましたが、予科練に行つてすっかり人生観が變つて帰つて来ました。人間が變りました。

海軍では艦諸共と言う考えがあります。同じ艦に乗り合わせたら一心同体「死ぬも生きるも一緒」運命共同体で、教育にもそういうことを感じました。当然一人の身勝手は全員の死に繋がります。隣の韓国では二年間、兵役に就かせるそうですが、日本でも軍隊と言うと悪いが、なにか、ボーイスカウトのようなもので一年か二年か団体教育、共同生活の習慣を身に付けさせれば良いかなと考えます。

今の学校などではいろいろのクラブ活動をやっている連中は、やはり礼儀も正しいし、上下の区別もあり、見ていると気持ちが良いなあと思います。

—海軍予科練同期生事情—
N班三十三人の同期生には、年齢差が五年あり

原」と言うのでした、班長は大阪外語大の出身だから「お前等はこの言葉が分かるか、俺も習った英語と、喋べるのとは違うので分らん」と言われました。

昭和二十年三月、六カ月間の教育が修了し、全員の適性検査が有り、「操縦」と「偵察」に分けられて、それぞれ八個分隊に編成されました。「操縦」は操縦桿を握るだけ、「偵察」は通信連絡と爆弾投下等が任務で、私は「操縦」でしたが訓練用の飛行機は一機も有りませんでした。

昭和二十年四月、宮津市の海軍航空廠水上飛行機修理工場に研修に行きました。ここで初めて飛行機に触れることができました。潮風にさらされたプロペラを拭くくらいでしたが、整備に行った他の連中は電気系統や油圧系統等の重要部位の修理に当りました。それでも三カ月でしたが飛行機に触れただけでも幸運でした。

宮津の研修が終わり、七月横須賀の特攻隊、第七十一嵐部隊伏竜隊に配属されました。七月二十

七日、滋賀里発、東海道線で大船で乗り換え、横須賀久里浜の久里浜工作学校に着きました。本部は工作学校にあつて、そこに寝泊まりして訓練を受けました。赴任の途中汽車の中から、一宮や名古屋等、沿線の焼野原を見て空襲を知りました。「伏竜特攻隊」とはどんな隊だろう、選ばれた誇りと不安が入り交じった複雑な心境で、久里浜の隊に行きました。

ここには憧れの特攻機も、船も無く、予想に反して潜水服を着て海に潜る訓練でした。海底工事に従事する人達が着用する潜水服姿です。海中は冷えるので分厚いメリヤスの肌着を着て、ゴム製の潜水服、頭は鉄火面の様なヘルメットをかぶり、鉛の板草履に胸に鉛の錘を付けて、水深五〜十メートルの「海底で伏したる竜の如く」待機し、攻めてくる敵上陸舟艇目掛けて竿に付けた爆薬を突き上げる。

一人良く百殺、自分自身が秘密兵器「伏竜」であるわけです。海中で前後左右に、自由に行動する、その夜は久しぶりの家族の団欒でした。空襲では裏の家も右の家も焼けてしまいました。兄も八月の末に復員して来ましたが、応召中の四年間は兄の銀行から給料を頂いたので私も中学に行けたし、留守家族の暮らしも出来たことは本当に有り難いことで心から感謝しています。

復員後、私は直ぐに名古屋鉄道に就職して昭和二十六年まで勤めました。次に二年間、名古屋栄養士専門学校に通って栄養士の免許を取得しました。

縁があつて信楽国立療養所に一カ年勤務しましたが、院長さんが隣の岐阜の人で、言葉も同じで意気投合して大津市立病院に移り、現役と囑託を合わせて約四十年勤務させて貰いました。大津市立病院を六十五歳で退職、今は年金生活でやりたいうことをやっています。

結婚は昭和二十八年二月一日、家内は宮津市の天の橋立ての人で、名前は恵美子、一つ違い。予科練時代の三カ月、宮津海軍航空廠にいた時、彼

るまでには大変な訓練が必要で、器具の使用法や呼吸方法を誤ると死んでしまいます。訓練にも多数の犠牲者が出ました。今思えば全く漫画的ですが、何の疑いも無く必勝を信じて訓練に励みました。毎日が死と隣合わせの訓練でした。

久里浜での訓練は十日余りでしたが、この訓練がまだ陽の目を見ない間に八月十五日を迎え、私達は救われました。玉音放送は校庭で聴きました。雑音で聴き取れませんでした。後でそれと分りました。

八月二十一日、「伏竜」の潜水具などを撤収して特別列車で舞鶴の防備隊に輸送しました。二十二日、舞鶴の防備隊に到着して潜水具の引き渡しを終了。即二十三日に現地で兵役解除となり、携行していた私物だけを持って復員致しました。

玉音放送から復員までは慌ただしい毎日でした。焼野原と思つて復員した我が家は、奇跡的に一軒だけ焼夷弾から逃れて、幸運にも母と妹が無事に待っていて、突然の私の復員を驚いたり喜んだ

女は同廠内の別の部署に勤務していたとのことで、全く面識も無かったのですが、お互いの友人を通じて知り合い、七年半の文通の末、めでたく結婚しました。結婚生活三十四年で十九年前に家内は他界しました。

思えば我々が受けた教育は、戦前の教育でした。青少年は白生地です。何色にも染められません。私達も戦争末期、俺が行かねばと、国難に一死もつて国に報ずるの心境でした。しかし予備学生とか、繰り上げ動員の二十歳前後の学生さん達の中には、世界の情勢も分かっていたながら、敢えて自我を殺して戦場に行かざるを得なかった人達の心境を思うと、さぞ辛かつたろうなあとと思います。

あの時代、誰が今日の平和な満ち足りた幸せな世が来ることを予見したでしょうか。大津市立病院勤務の昭和二十七〜二十八年頃は、まだ物資不足の時代でした。飢餓の時代です。入院のお見舞に卵を十個か二十個でも貰うものなら本当に感謝されたものです。牛肉等一般家庭では思いもよら

ぬ時代でした。

今や満ち足り過ぎる良き時代、暖衣飽食、世界中の欲しい物が即座に手に入る時代です。この豊かさが、尊い失われた多くの命の賜物であることを忘れないように、また悲惨な戦争を二度と起きないため、戦争を知らない若い世代に、自由と自我の区別、共同の社会、戦争の悲惨さを理解させるように、我々の苦勞の体験を語り継いで行かねばならないと思います。

海軍予備学生の思い出

石川県 松村 靈 俊

終戦の年、昭和二十（一九四五）年の三月二十四日、二十三歳の小生は、万葉の防人が「今日よりは顧みなくて大君の醜の御盾と出で立つ我は」と歌ったように、郷党に決別して海軍予備学生として館山海軍砲術学校に入校したのであった。今は八十四歳と老いたが、六十一年前のわずか五カ月間にすぎぬ予備学生の頃が、生涯忘れ得ぬ懐かしい思い出となっているのである。

旧制中学卒業に際し、小生は海軍兵学校を志望したのであったが、能登の寺の一人息子であったために、兵学校を断念して教員になるようにとの門徒の意向に沿って、広島高等師範学校に入学し、次いで広島文理科大学史学科に進んだのであった。

その大学三年の半ば、県の東部竹原町の三井精錬工場に勤労働員されて潜水艦の蓄電池用の鉛を